

## No.51 依田 久仁夫 —無題—

Kunio Yoda

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年 11月15日付 立川市市報記事より

依田久仁夫は作品をつくることを「孤立した自分自身を救うほとんど唯一の手段」と言う。彼は作品を通して、あらゆる差異を超えて他者と向かい合い、失われた微笑<sup>ほほえみ</sup>を交わすことを望んでいる。

もともと陶器の作家で、できるだけ少量の土を使い、風が通っているかのように陶器が透けていたり、あるいは植物の繊維のような作品を作っている。ファーレ立川の車止めの機能を持ったセラミックのベンチは、多くの人が座り、なおかつ永遠にそこにあるものとしてつくられた。かれは作品を設置した後、一週間ほど毎日ここに通り作品を磨いていた。このことが、どこか作品の魅力につながっていると思う。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

私はこのプロジェクトに多大な期待を寄せている。

参加しているという事もさることながら、これから一体どうなるのだろうという不安と問いに、明瞭な展望と適切な解答が返ってくるような予感がする。

私は今までの人生の後半を佐渡島で過ごした。人々は良くも悪くも隣人を大切に助け合って生きていた。

その島は牧歌的で居心地の良い抱擁としての村だった。そこではすべてが島の中で完結していたとっていい。

期待しても外からだれもやってこないのだ。しかしそれですくわれているのかもしれない。アステカのように予言通りやってきた神が侵略者だったという悲劇もある。

今私は佐渡と首都との中間にある町にいる。この土地は総資本に分割所有されている。

この美しい自然に最初に目を付けたのが外国人宣教師というのも皮肉な話だ。

佐渡で感じた歯がゆさは、いっそのこと都市に向かうしかないと私を変えた。

私には母の子宮から生まれ出る時の恐怖がずっと忘れられず、それに死の恐怖が重なって、どうも未来が苦手で、未来に比べればほんのささやかな人類の過去のことに関心を求めてしまう。作品にもそれが強く現れてしまう。

しかし、私の関心はヒューマニティであって、それが私にとって唯一可能な、そして生き抜くための労働と結びつくことを望んでいる。

我々は確かに今ここにいる。しかし我々の先祖たちははるかに遠いところからやってきてここで永い旅を終えた。

我々は生き延びた人類の末裔であり、他のどの民族とも共通の先祖をもっている。彼らは生き延びるのに適切な規模の社会を組織し、自然界の中で適正に生きるための理想を有していたはずだ。

それに対し現在の社会は人間的な発展の座標軸を見失っている。

悪徳の栄え、その抱擁としての大都会、それを魔都と呼んでもいいだろう。

それはブラックホールのようにあらゆるものを吸収してしまい、実在をただの金の道具にかえる。

人間の必要をはるかに超えたこれほどの人工の氾濫を嘗て経験したことがあっただろうか。

我々は知っている。

地上で罪を犯してきたのは人間だという事を、そして当の人間たちが精神も肉体も病んでいるという事も、更に、人間自身が解決しなければならないことも。

ヒューマンな都市の再生、都市をアート化することによる人間性の回復、この実験は、ガタリの言う実在の領土の創出につながる考え方を持っているように思える。

この試みは衝撃そのものだ。

こんなこと本気で考えて実行してしまう張本人たちに敬服する。